

# モンゴル文学の視点から

## モンゴルの口承文芸—特色と問題点—

原山 煌

モンゴルの文学は、長きにわたって無文字社会の中で形成されてきた。モンゴル地域を含む中央ユーラシアの騎馬遊牧民たちが文字を獲得するのは、6世紀なかば、アルタイ山麓に興って大遊牧国家を建てたトルコ系の突厥の時代にさかのぼる。かれらによって8世紀前半に「突厥碑文」と呼ばれる一連の記念碑に刻された「突厥文字」は、独特かつ素朴な語り口で突厥の支配の興亡を書き残している。しかしその後、この文字は継承されず、この文字による記録も「突厥碑文」、ならびにのちの回鶻帝国時代にも見られる同様の碑文にあるものがほとんどすべてとなっている。9世紀になって東トルキスタンに住むトルコ系の西ウイグル国の人たちは、ソグド文字に起源を持つ「ウイグル文字」を用いるようになる。ウイグルの勢力拡大、仏教の発展、そして特筆すべきはソグド商人と呼ばれたキャラバン商人たちの活躍によって、この文字は当時の中央ユーラシア地域において一種国際語的な重要性を持つにいたる。

中央ユーラシアの騎馬遊牧民が、ある程度広範囲に、また長いあいだにわたって使用される（つまりは生産的な）文字を持ちえたのは、13世紀初頭、チンギス・ハンの時代であった。かれのもと、モンゴルはモンゴル高原に覇を唱え、ついには世界帝国と称される一大支配圏を確立することになるが、その過程で「ウイグル文字」に出会い、それによってモンゴル語を表記するやりかたを採用したのである。モンゴル政権の公文書の正式言語は（たとえば中国を支配した元朝にあっても）モンゴル語であったが、それを表記する文字は、広く行き渡っていたウイグル文字起源のものではなく、元朝を創建したフビライ・ハンの命をうけ、チベット僧パクパがチベット文字をもとに作製した「パクパ文字」であった。しかし使用の一般性からいえば、パクパ文字は権力と直結する場面でしか使われず、14世紀元朝崩壊ののちに生き残ったのは、当然のことながらウイグル文字起源のモンゴル文字であった。

このように、文字が書写用として一般に使われるようになるのが元朝以降であったことから、モンゴルの人たちの文学表現は、いきおい口承文芸が主体となったのである。

モンゴルの口承文芸は、モステールト著の『オールドス口碑集』（東洋文庫 平凡社 1966）によれば、神話・伝説・おとぎ話・言い伝え・俗諺・歌謡・英雄叙事詩・俚諺・謎解き・呪詛・罵倒語・早口言葉・シャマンの呪文・ヨロール（祝詞）・マクタール（家や家畜などへの褒め言葉）・ホルポー（頭韻を持つ詩）のように分類される。オールドスとは、黄河の大屈曲部に囲まれた地域を指すが（漢語の「河套」という呼び方を見よ）、モステールが整理したこの地方のモンゴル人たちの口承文芸のありようは、その他のモンゴルのそれと大きくは異なる。

口承文芸においては、一般的特徴として、誤伝を避けるため、文の構成をさまざまに工夫することがおこなわれる。たとえば、対句にする、韻を踏む、故事成句などを織り込む、あるいはそれらを複合しておこなうことなどである。頭に入りやすく、忘れにくい、という口承文芸のもつ本来の力を衰えさせないようにする工夫が、われわれの想像も及ばないような細やかさで注がれてきていたものと考えられる。

モンゴルの口承文芸には、広い範囲にわたってシャマニズムの世界観が認められるが、いわゆる神話といえるようなものはない。パンテオン、ないしは神々の組織図とでもいうべきものがなく、チベット仏教伝来後には、仏教的世界観を流用した一種のパンテオンが見られないではないが、あくまでもそれは借用の域を出ないものである（もっとも、その借用の仕方に、モンゴルの人たちの嗜好を窺うことはできるだろう）。

もうひとつ、強調しておきたいのは、モンゴルに限らずアジア諸地域に存在する諸集団にとっては、ユーラシアという規模のもとで「地続き」の世界に属するというこの意味合いが存外に大きいということである。これは「島国」である日本という視点からは、なかなか実感できないことなのかもしれない。さまざまな文化要素が四方から流入して混在し、入り乱れているという状況は、北アジアの一隅にあるモンゴルとて例外ではない。モンゴル高原を中心とする北アジア一円に興亡した騎馬遊牧民族たちには、時代や民族のちがいを越えた共通性が、さらに言えば文化的基盤が想定されるのである。その基盤の中核にある要素は、シャマニズム的世界観であり、それをもとにモンゴル（やその他の騎馬遊牧民）の口承文芸や諸習慣が形成されているのである。モンゴルの場合、シベリアの森林狩猟民の文化要素が濃厚に感じ取れることは是非指摘すべき点であろう。

したがって、モンゴルの口承文芸を検討するときには、当該の題材が、多角的な成り立ちからなる文化要素のうちのどの部分に相当するのかを、慎重に見極めなければならないであろう。

こうした前提のもと、一般にモンゴルの「神話」といわれることのあるいくつかの伝承を見てゆきたい。

### 『元朝秘史』に見える「神話」など

最もよく知られるのは、『元朝秘史』（以下、『秘史』と略）に見える、いわゆる「蒼き狼」モチーフである。『秘史』は、原題をモンゴリン・ノーツ・トブチョー〔モンゴル語で「モンゴルの秘密の綴り」の意〕といい、モンゴル語で書かれたものだが、現存する伝本は、そのモンゴル語テキストを漢字に音訳し、さらに漢語の逐語訳と大意訳を付したものである。チンギス・ハンの一代記を主内容とし、その続きにある後継者オゴデイ・ハンの略伝、冒頭のチンギス・ハンに至るまでのモンゴルの通史からなる。これは、モンゴル人の「歴史観」にもとづき、モンゴル語で書かれた最初のまとまった歴史文学的著作である。中国におけるような既成の歴史作品を持っていなかったモンゴルの人たちが、苦心してまとめ上げた『秘史』は、歴史事実を記述しようとする散文の部分と、特に注目すべき場面をくっきりと目立たせるための韻文の部分とが同居しており、その違いは明瞭に見てとれる。まさにその韻文の部分に、従前のモンゴルにおける口承文芸の豊かな蓄積が盛り込まれていることが窺えるのである。

『秘史』全巻の冒頭に置かれるのが有名な「蒼き狼」と牝鹿のモチーフである。「上天からの定めによって生れたまだらの狼があった。その妻なる白い牝鹿があった。テンギス〔湖〕をわたって、オナン河の源なるブルハン・ハルドン〔山〕に住まいし、生れたのがバタチカンであった」（第1節）。このバタチカンから生れた子孫たちがモンゴルという集団を形成してゆくという筋書きで、いわばモンゴル部族全体の起源にかかわる伝承である。いうまでもなく、これは全世界的に広く見られる所謂「犬種神話」と関係があらうと思われるが、北アジアにおける狼種伝承は、これより早く、古代トルコ系民族からなる突厥や高車の族祖伝承にも現れる。ただ、その場合、突厥においては人間の男性（幼児）とそれを育てた牝狼、高車では美しい（人間の）王女と牡狼というペアリングになっており、

変化が見られる。

『秘史』に見えるもう一つの「神話」的伝承は、チンギス・ハン家に直結する祖先として説明されるアラン・ゴアにかかわる。彼女は、光の精霊をみごもって子を孕むのであるが、そのとき生れた末子ボドンチャルがチンギス・ハン家の遠祖に位置づけられるのである。アラン・ゴアは言う。「夜ごとに光る黄色い人が天幕の煙出し穴から入って来て、私の腹をさすり、その光は腹の中に透って行った。出るときは、月の光で黄色い犬のように這って出たのです。…これから見ると、明らかにその人は天の子であったよ」(第21節)。かくしてチンギス家を含むモンゴルの三大氏族の起源が説明されるのである。これは、典型的な感生始祖神話というべきで、前述の狼祖伝承とは明らかに別系統に属する。

『秘史』には、チンギス・ハンによって統一されたモンゴル諸部族全体にかかわる伝承の集大成というおもむきがある。大きな集会などが開かれた際に、祭祀儀礼の一つとして、『秘史』(を朗誦するなどして)によって、全体の共有する族祖や各部族の成り立ちなどを相互に確認し、その集団全体のアイデンティティーを更新していたのであろうという説もあるが、その種の伝承のありようや、伝達方法の問題など、日本古代の場合と比較検討する必要もあろうかと思われる。

### 『集史』に見える「神話」

ところで、西アジアにおかれたモンゴル政権イル・ハン国(1258-1353。チンギス・ハンの孫フラグによって創建)においては、モンゴルの世界的支配を説明する幾つかの歴史書が著された。そうした記録によって、遠く離れたイランの地にあっても自らのアイデンティティーを忘れないよう心がけたのであろう。最も有名なラシード・アッディーン(1247-1318)著になる『集史』には、『秘史』とは異なる始祖伝承が見える。この著作は、モンゴルの支配を、ユーラシア全体の歴史の枠組みから説明しようとする壮大な意図の下に編纂されたものである。「総合史」とか「歴史集成」などとも呼ばれるのは、それゆえである。

さてラシードによれば、他部族との抗争で、危く全滅という危機に、なんとか生き延びた2組の男女が、エルグネ・クン[ラシードは、険しい岩壁、または狭隘な峡谷の意であるとする]という山脈に取り囲まれた地に逃げ延び、そこで彼等から派生した人たちが大いに発展して諸部族に分かれた。かれらは、切り立った岩壁の外の世界に脱出する方途を探り、ついに日頃従事していた鉄鉱採掘の技術を生かして、鉄鉱脈に夥しい木材を積み上げて火をつけ、70のふいごで火勢をあおり、鉱坑を熔解させて道を造り、そこを通過して外界に出たというのである。チンギス・ハンの後裔たるモンゴルの帝王たちは、この事を追憶して新年の前夜に祭典をおこなったという。それは、鍛冶屋が皇帝の前で灼熱した鉄を鍛え、一同が上帝に感謝するというものであったと。なお、ラシードは、『秘史』にも見えるアラン・ゴアの感生伝承もその著作に取り入れている。

こうした伝承の背後に見える共通要素は、シャマニズム的世界観である。遊牧・狩猟というモンゴルの人たちの生業には非常に身近な存在である動物界との深い関与、垂直的宇宙観を基盤に置く上天観念など、いずれもチベット仏教流入以前のモンゴルの人たちの精神世界を端的にうかがうことができる要素である。

### 仏教的世界観の加上

今日よく知られるように、モンゴルの人たちは元朝ころよりチベット仏教に親しみ始めたが、広く受容されるようになったのは、14世紀になってからであった。さらに清朝(1616-1912)がモンゴル

対策として本格的にその拡大を図ってからは、モンゴル各地にチベット仏教寺院が建立され、モンゴル人で出家して仏僧になる人も増えた。チベット仏教がモンゴル文化の主要な項目の一つになったわけである。こうした文化的変容を受けて、モンゴルの口承文芸にはチベット仏教の諸仏が精力的に取り入れられて行くようになる。在来のシャマニズム的神格とこれら仏教的要素とが混淆されて、モンゴル独特の登場人物が形成されて行くのである。たとえば、英雄叙事詩に現れる至上神は、ホルモスダ・テングリ（梵天）であるし、諸伝承や歴史書にも仏教的世界観にかかわる知識や用語がふんだんに盛り込まれるようになるのである。

上に簡述したように、モンゴルには独自の完成（整備）された神話世界というべきものはなく、さまざまな淵源から出た文化要素が、モンゴル人の好みに応じて次々に摂取されて来て、今日私たちが接するような複雑多岐な表情を持つようになったというべきであろう。モンゴルの「神話」世界、ないしは口承文芸の正しい理解を得るためには、なによりもまず、錯綜した諸要素の適正な「腑分け」がまず要求される所以である。

#### 参考文献

- 村上正二「モンゴル部族の族祖伝承—とくに部族制社会の構造に関連して—」『モンゴル帝国史研究』風間書房 1993  
原山 煌『モンゴルの神話・伝説』東方書店 1995  
小澤重男訳『元朝秘史』上・下 岩波文庫 岩波書店 1997